平成１７年９月１日発行

かまぼこ

第１７号

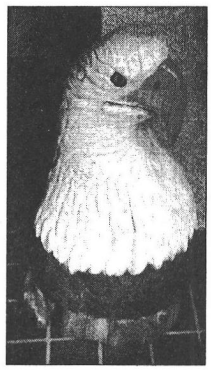
発　行　わがまち大田蒲田西地区推進委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

感動の彫刻家　戸倉幹二さん

西蒲田六丁目熊野神社裏の閑静な住宅街の一画に不思議で、感動的な庭が目に飛び込みます。

玄関先の庭のゴリラ、フクロウ、ツル、ワシ等沢山の動物を、道行く人達が足を止めて眺めて、心和んでいるお宅が、今回「わがまちの顔」でご紹介する戸倉幹二（七十九歳）さん宅です。

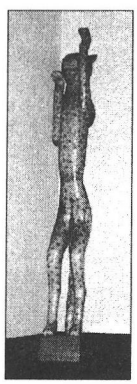


現役時代は、紙器業の仕事をしていたそうですが、趣味で絵画やデッサンを描いていたそうです。

仕事をリタイアして、趣味であったデッサンを生かして、鎌倉彫りを独学で覚え、手近にある木片を使い、ノミで彫ったのが始まりだそうです。

製作にあたり、立木の切り株や大工さんからの廃材また旅行先から持って帰った木等、手元に集まった材料でイメージを考え、図鑑やイラストのコピーを元に、木に下絵を描き、ノコギリでアウトラインを切り、ノミで彫っていきます。仕上げは紙ヤスリで磨きます。

一つの作品を仕上げるのに一ヶ月程かかるそうです。製作過程で一番難しいのが、全体のバランスと立体感とのお話でした。



最後の仕上げの過程で、随所に色々なアイデアが織り込まれています。例えばキリンの模様をだすため、テープを貼ってニスを塗り、塗り終わってからテープを剥がしたり、ヒョウの模様を一点一点ニスで手書きをしたり、手間のかかる作品作りをしています。

今までに五十点ほどの作品が製作されており、作品の多くが知人、友人、お寺、病院、地元の相生保育園等に寄贈されており、近隣の人々の話題になっています。

木彫りの他にも、パソコンで絵を描いたり、将来は陶芸も手がけたいし、大きな木でアート的な作品を作ってみたいと夢を語っていただきました。

作品を見ていると、木の温かみと戸倉さんの優しさ、前向きな姿勢等数多く学ばせて頂きました。

庭の花々の咲き乱れる中に、優しい目をした動物たちが門番のように庭に溶け込んでいる風景を一度、足を止めてご覧になってはいかがですか。

（取材　伊藤・高橋）

シリーズ「蒲田と文学」その4

蒲田行進曲　つかこうへい

音楽「蒲田行進曲」

♪虹の都　光の港　キネマの天地・・・

ＪＲ蒲田駅ホームの発車オルゴールとしてもお馴染の曲です。

昨年はＪＲ蒲田駅開業百年にあわせ、この曲に踊りの振り付けがなされ、西口駅前広場や商店街アーケードで、大パレードが展開されました。地元商店会では、このイベントで街おこしをと考え、「蒲田行進曲フェスタ」と銘打って毎年の恒例行事にしていく予定とか。今年も四月十七日に盛大なお祭りが開催されました。

そもそも蒲田行進曲は、松竹映画「親父とその子」の主題歌でありました。五所平之助監督で封切は昭和四年九月。そしてレコードの発売は一ヶ月前の八月、当時はまだ無声映画の時代でした。

原曲は「バガボンドソング」。ブロードウェイ・ミュージカル「放浪の王者」の中のＲ・フリムルの作曲で、ＳＰ盤レコード「乾杯の歌」のＢ面として日本に持ち込まれたものでした。リズムが軽快で楽しいことから、当時蒲田松竹の音楽部長であった堀内敬三氏に編曲と作詞を依頼しました。蒲田撮影所ではこの歌がよく口ずさまれるようになり、さらに松竹蒲田のテーマソングとなりました。

映画「蒲田行進曲」

制作　松竹・角川春樹事務所
監督　深作欣二
脚本　つかこうへい
原作　つかこうへい
出演　風間杜夫、松坂慶子、平田満、他
１９８２年（昭和五十七年）

ストーリー

売出し中の映画俳優・岡倉銀四郎（風間）は、自分の子供を身ごもった落ち目の女優・小夏（松阪）を、取り巻きの大部屋俳優・村岡保次（平田）に押し付ける。盲目的に銀四郎を崇拝し、結婚すら黙って受け入れるヤスを初めは苛立たしく思う小夏だったが、やがてヤスの献身的な愛情を受け入れるようになる。そんな時、銀四郎の主演映画「新撰組魔性剣」の見せ場、池田屋・階段落ちシーンの中止が決まる。危険な撮影にスタントマンさえ嫌がったのである。ヤスは小夏の反対を押し切り自ら志願して階段落ちに挑むのだが・・・。

つかこうへいの直木賞受賞作の映画化。主役の三人にとっても間違いなく代表作だろう。特に銀ちゃんはその魅力的なキャラクターで鮮烈な印象を残し、一時は風間の代名詞といってもいいぐらいだった。あまりにもあたり役だったために、どんな役でも銀ちゃん的な味を要求されてしまう時期もあったが、それだけみんなから愛されていたということだろう。いま「蒲田行進曲」というとヤスでも小夏でもなく、真っ先に銀ちゃんを思い浮かべる人が多い。確かに映画史に残る名キャラクターだったと思う。

舞台公演は、映画より二年前の１９８０年。舞台の方は笑える場面も多いのだけれど、笑いがすぐにひきつってしまうという感じ。舞台では人間のどうしようもないダメさや残酷さを容赦なく描いている。そのどうしようもない人間たちの愛しさもまたきちんと描いているから感動的な作品となっていたのだけれど、惨めさを真正面からとらえた演出は率直にいって重すぎた。

これを映画にするなんて、それも監督が「仁義なき戦い」の深作欣二だなんて、いったいどんな映画が出来上がるか想像もできなかった。松阪慶子のような大スターが小夏を演じるとい

うのにも違和感があった。
しかし失敗作では？と思っていた映画「蒲田行進曲」に素直に感動した。
つかこうへいにとって想像の世界だった映画界は、深作欣二にとっては日常である。そこに生きる大部屋俳優たちへの眼差しは暖かく、ヤスへの共感も深い。その分銀ちゃんが描き不足となった感は否めないが、池田屋の階段を登っていく風間のカッコよさには見とれてしまう。このカッコ良さだけで充分だと思ってしまうぐらいだ。
男性から見た女性の理想像を体現したような小夏も、素朴で素直な味のヤスも舞台公演とはまったく違う良さがあった。泣く・笑う・手に汗握ると、娯楽映画の基本をきっちりと押さえ、判りやすく、それでいて内容は濃い。
ヤスが自分でもよくわからない怒りと憎しみを小夏とお腹の赤ん坊にぶつけるシーンも、演じた平田のキャラクターに負うところが大きいのだろうが、嫌悪感を覚える一歩手前で止まっていた。銀ちゃんという男を愛した二人の人間の結びつきが、階段落ちという危険な行為を前にして、切なく胸に迫ってくる。
舞台公演ではヤスが階段を落ちたところで終わっていた（平成版では初演と違いハッピーエンドだった）が助かったのか死んだのかも判らない。死を賭けて階段を転げ落ちるという行為そのものが、自ら惨めさを選び取り傷つくことでしか自己の存在を確認できない当時のつか芝居の、登場人物の心情を具現化したような行為であり、行為の結果を描くことにはあまり興味はなかったのではないかと思う。
しかし映画はそうではなかった。転がり落ちた階段をヤスは必死に這い上がってゆく。そしてそのヤスに銀四郎は「上がってこい、上がってこいヤス！」と階段の上から手を差し伸べるのである。銀四郎だけではない。その場にいる人物全員が、そしてカメラが、ヤスの行動に涙と声援で応えている。ここでは階段落ちは下降志向の象徴ではなく、熱き活動屋の一世一代の見せ場であり、ヤスが小夏のお腹の子の父親となるための儀式にも見えてくる。晴れてヤスは笑顔で赤ん坊を抱く。初演の舞台からは想像も出来ない幸せな結末だった。
日本アカデミー賞を始め、各映画賞を独占、八十年代を代表する大ヒット作となる
http://kazenomori.parfait.ne.jpより

つか こうへい

つかこうへい

蒲田行進曲を書いた二つの動機

一つ目は、ビリー・ワイルダーの「サンセット大通り」を観たことだ。
かつては銀幕の向こうで名声を集め華やかなる世界で、その華と美しさだけで観客を魅了し続けたが、いまでは一線から遠のき、映画会社からは声すらもかからなくなっていた。そんな女優さんが、かつての財産で建てた豪邸に住み、夜毎起きだしては自分に当ててファンレターを書いていた。そういうエピソードである。夢の中に何時までもいたいと願う女の寂寥感、妄想の中で生きていかなければならない、女の業にドラマを見たのだ。
そしてもう一つは「風と共に去りぬ」のビビアン・リーだった。その気品と魅力にあてられてその夜は一睡もできなかった。が、その一週間後に、「ローマの哀愁」という映画で、若い女ができたことをなじるビビアン・リーの髪をつかんで鏡の前に連れて行ったウォーレン・ビーティが、「あんたはもう五十だぜ」と吐き捨てるシーンに強烈なショックを受けた。
そして、つかはその銀幕の果ての姿を描くための取材を続けていく過程で、その構造の中に滅びゆく新撰組のドラマをからませたら面白くなるのではないかと思った。老い衰えていく女優と、日本を夢見ながら滅びていく新撰組、その哀れな運命に何か通じるものがあるのではないか、取材のために通いつめた京都太秦撮影所で「階段落ち」に出会ったのだ。その階段落ちを専門にやり、背中に真一文字に傷跡を残す俳優さんに会ったことから、この物語は一気に形を整えた。
「つかこうへいによるつかこうへいの世界の中から」より
（取材、石渡、柏村、都築）

五十周年を迎えた道塚自治会

花島　文雄

当自治会は道塚小学校をほぼ中央にして人口五千三百人、世帯数二千六百世帯の規模です。

昨年は創立五十周年を会員のご協力のもと、行政、近隣の皆さんにお集まりいただき賑やかに行いました。

五十年の中、戦後の復興により社会整備を成し遂げ、立派な町になったと自負しております。

これもわが町の先輩の郷土愛と先見性の賜物で、また歴代会長、役員、会員のお力と感謝しております。そして伝統と実績に培われた町をさらに明るく、住みよい環境を作るために、努力しなければならないと思っております。

自治会の主な行事としては夏の三日間の盆踊り大会、ラジオ体操、どじょうつかみ大会、防災訓練、敬老会、餅つき大会等で、大勢の人が集まります。自治会肝いりのパソコン講習会は道塚小学校をお借りし、自主的に会員の方を先生として行っており、今年で四年目になります。特に「六十歳以上の方どうぞ」に年配の方の参加率は高いと思います。

また、矢口消防団第六分団、市民消火隊、婦人消火隊の活動も目覚しいものがあります。お蔭様で平成十六年度は当地区が無火災で矢口消防署より表彰を受けました。

道塚小学校の「歌のあるまち」「花のあるまち」「挨拶のあるまち」の方針に賛同参加し、ジョイントコンサートへの協賛、学校のまわりに子供たちとの共同作業による花壇作り、子供たちへの積極的な声かけと、「地域子ども教育推進事業」の一環である校庭開放には自治会として当番制で担当し、協力しております。

平成十三年には念願の自治会館も会員、関係各位のご支援、ご協力により完成し、地域の活動の場として活用しております。

今後は更なる発展を目指し、会員相互の和と共に「楽しく、明るい住みよい町づくり」に努力しなければなりません。

会員の皆様のご協力を切にお願いいたします。

投稿記事募集

「かまにし17」第19号（平成十八年三月一日発行）から、みなさまより投稿されました記事を掲載することになりました。

旅の思い出、身近なエピソードなど、原稿をお寄せください。

投稿要項

内容　ジャンルは問いません

文字数　四百字詰原稿用紙一枚

署名　実名あるいはペンネーム

投稿先　事務局まで

投稿の際は住所、氏名、電話番号を明記してください。

年に四回という発行回数の関係で、原稿が必ずしも紙面に掲載されるとは、限りません。選考は編集委員会で行いますのでご了承ください。

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，494人
	女	27，187人
	計	56，681人
世帯		29，487世帯

平成17年8月1日現在

編集後記

今回のわがまちの顔では、趣味の彫刻でありながら、玄人はだしの戸倉幹二さんをご紹介しました。誰にも師事せず、独学で極めてしまう、そのセンスと情熱には脱帽しました。インタビューの中で、特に印象に残ったのは、「常日頃、前へ前へと心がけている」とのお言葉でした。見習いたいと思います。

特集記事では、蒲田行進曲を取り上げてみました。蒲田を代表する文学ですが、なかなか取り上げられず、ようやく書くことが出来ました。お楽しみいただければ、幸いです。

投稿記事はどんな記事が送られてくるのか、編集委員一同、とても楽しみにしております。

みなさんと共に良い紙面を作って行きたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

情報紙に対するご意見・ご感想などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五